

VUV・SX 高輝度光源利用者懇談会 令和5年度総会議事録

1. 日時：令和6年1月10日（水）11:00～12:00
2. 会場：アクリエ姫路大ホール（日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムS会場）
3. 参加人数：出席者71名（委任状34通を含む）で総会は成立（会員数417）
4. 議事・報告
 - ① 推薦により藤井健太郎氏（量子科学技術研究開発機構）が議長に選出された。
 - ② 虻川匡司会長（東北大学）より年頭の挨拶がなされた。今後の本会のあり方に合わせた会則の変更を議論したい旨が述べられた。
 - ③ 宮脇淳編集委員長（量子科学技術研究開発機構）より、ニュースレターについて報告があった。2024年1月に、「VUV・SX領域の高調波レーザーの進展」を特集した第7号が発行された。今後は全ての記事が集まってからの掲載ではなく、正式な発行前にも逐一ウェブページ上に記事を掲載する形を検討している旨が示された。
 - i) 菅滋正名誉教授（大阪大学）から、本会の活動の周知を図るために、ニュースレターのアナウンスは本会のメーリングリストで行うのみではなく、より幅広い放射光ユーザーへ向けて行うべきではという指摘があった。
 - ii) 木下豊彦幹事（高輝度光科学研究センター）から、今後本会のあり方を変えていく上で、活動の発信を通じて新たな会員を集める努力をすべきとのコメントがあった。
 - ④ 奥田太一会計委員長（広島大学）より令和4年度の会計報告があり、承認された。また、奥田太一会計委員長より令和5年度の会計中間報告があった。
 - ⑤ 虻川匡司会長より本会の将来のあり方に合わせた会則変更案が提示され、審議が行われた。施設や光源の種類にとらわれず、VUV・SX波長領域におけるサイエンス全体を議論する場としてVUV・SX懇談会を再定義すべきとの理由から、下記の変更案が示された。

(現在) 会則 第 2 条 (目的)

本会は、東京大学が建設する VUV・SX 高輝度光源施設の建設協力ならびにその利用研究計画に関わる情報交換の円滑化を図るとともに、会員相互の交流の促進を図り、放射光科学の発展に寄与することを目的とする。

(変更案) 会則 第 2 条 (目的)

本会は、全国的な組織として VUV・SX 高輝度光源の開発ならびにその利用に関わる情報交換の円滑化を図るとともに、会員相互の交流の促進を図り、光科学の発展に寄与することを目的とする。

- i) 松井文彦教授 (分子科学研究所) より、変更について賛助会員からの賛同を得ているのかという質問があった。当初の東京大学の新光源建設への企業の賛同に感謝するとともに全国的な光源開発へと計画を展開する上で引き続き、ご支援いただきたい、という趣旨である。
 - ii) 木下豊彦幹事より、会の活動に比して企業からの拠出が過多ではないかとの指摘があった。
 - iii) 虻川匡司会長より、まだ賛助会員の賛同は得ておらず、総会での変更案可決後に賛助会員へ拠出継続の可否を諮る予定という回答があった。また、今後研究会の開催等を通して拠出金を使用予定との回答があった。
 - iv) 賛成多数により変更案が可決された。
- ⑥ 堀場弘司幹事 (量子科学技術研究開発機構、VSX 懇談会あり方 WG 委員長) より、研究会の提案がなされた。光源にとらわれず VUV・SX のサイエンスを広く議論するという趣旨で、ISSP ワークショップとの共催での開催予定であり、海外からも講演者を招待予定である旨が述べられた。
- i) 虻川匡司会長より、1 年に 1 度程度 VUV・SX 懇談会としてのワークショップを継続していくことが会の存続に繋がるという考えのもと、研究会を企画したという補足がなされた。

- ii) 安居院あかね氏（量子科学技術研究開発機構）より、研究会に海外の講演者を招待することと、会則第2条の変更案で「全国的な組織」として日本国内に限定する文言が使用されていることの整合性について疑問が示された。
 - iii) 菅滋正名誉教授（大阪大学）より、国際的なコミュニケーションを取りながら人類全体として VUV・SX のサイエンスの発展を目指すような会則にすべきという要望が述べられた。
 - iv) 奥田太一幹事より、第2条の「情報交換の円滑化」という文言には国際的な情報も含まれており、会則は国際交流に支障をきたすものではないという指摘があった。また、組織としては日本国内の放射光関係者で構成されているため、会則変更の必要は無いのではという意見が述べられた。
- ⑦ 虻川会長より、令和5年度活動報告がなされた。幹事会、ニュースレター発行、総会の開催が報告された。
- ⑧ その他、総合討論で質疑がなされた。
- i) 菅滋正名誉教授から、VUV・SX の中で活動を閉じるのではなく、今後は硬X線領域とも関わりを増やしていくべきという提案がなされた。
 - 1. 虻川匡司会長より、放射光学会年会のような場でシンポジウムや特別セッションを設け、全波長域の発展を共に議論できるとよいのではという意見があった。
 - 2. 木下豊彦幹事から SPring-8-II のニーズ調査が始まっていることに言及があり、本会でまとめた議論を調査に反映させるという形での関わり方が示された。また、放射光学会年会でのシンポジウム開催のためには、学会執行部へ提案の必要があることに言及があった。

以上